



[原著]

成人看護学実習における学生の捉えた 受持ち患者との心理的距離感の変化と影響要因

堤 かおり¹⁾、河村 圭子²⁾、那須 さとみ¹⁾

1) 宝塚医療大学和歌山保健医療学部看護学科

2) 梅花女子大学看護保健学部看護学科

要旨

成人慢性期看護学実習（3週間）を履修した看護系大学3年次生10名を対象に、患者との心理的距離感と影響を及ぼす要因を明らかにする目的でインタビュー調査を行った。

その結果、学生に患者との心理的距離感を0~100cmで示してもらった心理的距離感は、実習経過と共に近づいていた。しかし、一部の学生では、患者の状態変化、実習途中での患者変更、実習生としてとるべき行動の戸惑いによって、数値は一旦離れたが、実習が進むと再び近づいていた。

学生の語りを質的記述的に分析した結果、学生の心理的距離感に影響を及ぼす要因は、実習開始時では【実習への心理的障壁】【やっていけそうという思い】、実習1週~2週目では【よい援助関係構築のための努力】【患者との関わりへの葛藤】、実習3週目では【新たな関係性の構築】であった。看護教員はこれら影響要因をふまえた実習指導が必要である。

キーワード：心理的距離感、成人看護学実習、実習指導

緒言

看護基礎教育における臨地実習は、看護の専門性が培われる重要な科目である。

A 大学成人看護学慢性期実習は3週間、1グループ5~6名で構成し、入院患者を受け持ち、看護過程を展開する。実習目標のひとつは、学生は積極的にベッドサイドに行き、コミュニケーションをとることであり、患者の全体像の把握と看護問題の明確化のために重要な項目としている。しかし、学生が患者とのコミュニケーションで直面する問題として、場に応じた適切な言葉遣いや態度が未熟であり、さらにはコミュニケーション事態に負担感を持つ学生も見受けられる。このような学生の場合、受持ち患者との心理的距離を、遠く感じてい

る可能性があり、その後の患者との信頼関係構築や、実習プロセスに影響を及ぼすと考えられる。しかし、患者が病いと共に生きていくことを理解し、患者に寄り添った看護援助を行っていくためには、言語的・非言語的コミュニケーションを通じた患者との信頼関係の構築が不可欠であり、それに影響を及ぼすと考えられる心理的距離感についても理解する必要がある。

先行研究には、看護学実習における対人距離や身体的距離に焦点を当てた調査がある。基礎看護学実習において、患者と学生間の身体的距離は「個体距離」または「会話域」を取る傾向があり、実習の初日から3日目にかけてこの距離は縮小するが、4日目以降は再び拡大する¹⁻²⁾と報告され

堤 かおり

和歌山市中之島 2252
宝塚医療大学和歌山保健医療学部看護学科

E-mail: k-tsutsumi@tumh.ac.jp

2022年12月15日受付
2023年12月9日受理

ている。その理由として、初期には患者と学生相互が抱く親密感により近くなるが、4日目以降は関係性が安定し学生の不安が軽減し、距離によって親密さを高めようとする必要がなくなり、適切な距離に修正しようとしているからではないかと述べられている。また、3年次の精神看護学実習では、実習経過とともに患者との距離は縮小することが報告されており、それは3年次になると学生は患者との関係を形成する重要性を認識し、早く良い関係を築き看護を展開しなければならないという思いが強くなっているためではないかと考察されている³⁻⁴。これらの先行研究は重要な示唆を提供しているものの、患者との心理的距離を学生はどのように捉えているのかについての検討はまだ不足している。本研究によって、学生が捉える患者との心理的距離感の変化とその要因がわかれば、看護教員の実習指導に資する新たな示唆を得ることが期待できる。

1. 研究方法

1. 研究目的

A看護系大学3年次の成人慢性期看護学実習を履修した学生を対象に、実習経過における学生の捉えた患者との心理的距離感の変化と影響を及ぼす要因を明らかにする。

2. 用語の定義

「心理的距離感」

学生が主観的に捉えた受持ち患者との間の親密さの程度であり、近づこうとする動きと離れようとする動きの両方の心理的動きをもつ⁵。

3. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

4. 研究協力者

成人看護学慢性期実習を履修したA看護系大学3年次生のうち、研究協力を呼びかけて、同意が得られた学生を研究協力者とした。

5. 調査方法

1) 調査期間

2016年9月～2017年2月

2) データ収集方法

当該実習の成績評価終了後に、実習経過

(実習開始時、実習1週目、実習2週目、実習3週)を振り返り、学生が捉えた患者との心理的距離感とその影響要因について半構造化インタビューを行った。学生には研究依頼時とインタビュー時に心理的距離感とは何かについて説明を行い、理解を確認した上でインタビューを行った。インタビュー内容は、「実習経過における患者との心理的距離感を数値で示すとしたら何cmか。0cm(最も近い)～100cm(最も離れている)で示してください。」「数値で示された心理的距離感に影響したと考えられることは何か。」とした。心理的距離感を数値で示してもらったのは、学生が主観的に捉えた心理的距離感をできるだけ客観的に把握するためである。これはエドワード・ホルの対人距離の定義⁶を参考に、0～45cmまでは親密距離として0に近いほど患者に近く親密さを感じており、100に近いほど患者との心理的距離感が遠い、近づきがたいと捉えていることとした。インタビューはプライバシーの確保ができる個室で、研究協力者1名に対して60分以内とし、当該実習指導に関わっていない教員が実施した。また、研究協力者の了承を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

3) 分析方法

学生が示した心理的距離感の数値は単純集計を行った。次に逐語録から影響要因を抽出し、研究協力者の語りの意味内容を変えないよう要約してコード化した後、類似性にしたがってサブカテゴリーを、さらに統合してカテゴリーを形成していった。分析の信頼性・真実性を確保するため、質的研究者と看護教育の専門家にスーパーバイズを受けて実施した。

4) 倫理的配慮

研究協力者には当該実習終了後の学業に支障のない時間に研究目的、方法、インタビューは当該実習の成績評価後に行うこと、インタビュアーは実習指導教員以外の教員が行うなどの倫理的配慮を説明し、研究協力の依頼を行い、同意が得られた学生を研究協力者とした。本研究は研究倫理委員会の承認を得て行った(梅花女子大学研究倫理審査会承認番号:0010-0083)。

表1 実習経過における学生の捉えた患者との数値的距離 n = 10

学生	実習開始時 (cm)	実習1週目 (cm)	実習2週目 (cm)	実習3週目 (cm)
A	100	60	20	10
B	90	60	40	25
C	90	60	40	30
D	100	80	45	25
E	95	70	75	30
F	80	40	70	35
G	95	75	80	30
H	85	50	85	40
I	85	60	80	50
J	80	60	70	30
平均値±SD(cm)	90.0±7.5	61.5±11.6	A-D : 36.3±11.1 E-J : 76.7±6.1	22.5±8.7 35.8±8.0

注 1) 0 cm (最も近い) ~ 100 cm (最も離れている)

注 2) A~D : 数値的距離感が近づいた学生 4 名 E~J : 2 週目に一旦数値的距離感が離れた学生 6 名

II. 結果

1. 研究協力者の背景

研究協力の得られた学生は 3 年次生 10 名、全員女性で成人看護学実習以外の領域の実習経験がある学生は 6 名、4 名は当該実習が最初の実習であった。学生は総合病院の内科系病棟において実習を行った。3 週目まで継続して患者を受け持った学生は 8 名、2 週目ははじめに受持ち患者が変更になった学生は 2 名であった。患者変更になった学生 2 名には、新たな受持ち患者に対する心理的距離感について語ってもらった。

2. 実習経過における数値で示された心理的距離感

学生 10 名の数値で示された患者との心理的距離感を表 1 に示す。実習開始時の心理的距離感は平均 90.0 (SD 7.5) cm、1 週目は平均 61.5 (SD 11.6) cm であった。実習 2 週目から 3 週目について、4 名 (A-D) の 2 週目は平均 36.3 (SD 11.1) cm、3 週目は平均 22.5 (SD 8.7) cm であった。6 名 (E-J) の実習 2 週目は平均 76.7 (SD 6.1) cm、3 週目は平均 35.8 (SD 8.0) cm であった。

3. インタビューによる患者との心理的距離感に影響を及ぼす要因

インタビューによる患者との心理的距離

感に影響を及ぼす要因を表 2 に示す。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉、コードを『 』、語りを「 」とした。インタビュー時間は平均 27 分であった。

1) 実習開始時における心理的距離感に影響を及ぼす要因

実習開始時は【実習への心理的障壁】【やっていけそうだという思い】の 2 カテゴリーから構成されていた。

(1) 【実習への心理的障壁】

このカテゴリーは、〈患者と会話することへの苦手意識〉〈過去の実習体験からくる不安〉の 2 サブカテゴリーから構成されていた。

① 〈患者と会話することへの苦手意識〉

学生は「人見知りという性格が影響してうまく話せなかった」「必要以上に緊張するタイプでしゃべられなかった」「自分自身がコミュニケーションっていうのを難しく感じてしまう」「どんなことを話せばいいのかわからなかった」など、『自己の性格が影響してうまく話せなかった』『何を話したらいいのかわからなかった』ことを語っていた。

② 〈過去の実習体験からくる不安〉

学生は「コミュニケーションがうまくいかなかった基礎看護学実習での体験があっ

表 2 実習経過における学生の患者との心理的距離感に影響を及ぼす要因

実習経過	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
開始時	実習への心理的障壁	患者と会話することへの苦手意識	自己の性格が影響してうまく話せなかった 何を話したらいいのかわからなかった
		過去の実習体験からくる不安	コミュニケーションがうまくとれなかった実習経験から不安があった 過去に受け持った経験がない患者で不安だった
	やっていけそうだという思い	過去の実習経験によるやっていけそう だという思い	過去の実習でもできたのでやっていけそうだった 以前の実習経験から構えずやっていけると思った
		笑顔で挨拶や会話ができたことによる やっていけるとする思い	会話がスムーズにできてうまくいきそうと思った 笑顔で挨拶ができたことでやっていけると思った
1 週 目 2 週 目	よい援助関係構築のための努力	患者との関係性を築くための コミュニケーションの実施	積極的に患者の元を訪れた 患者を知るためのコミュニケーションをとった
		患者のニーズと心地よさに配慮 した基本的なケアの実施	患者のニーズからケアを行った ケアは患者が心地いいと感じてもらえるように行った
	患者との関わりへの葛藤	患者の状態変化によるためらい	患者の状態が変化することで戸惑った 患者の状態が変わって患者の元に行くことをためらった
		実習生としての行動をとることによる 戸惑い	実習生としての行動をとらなくてはならないことで悩んだ 実習指導やカンファレンス参加のため患者の元に行けず戸惑った
3 週 目	新たな関係性の構築	受持ち患者変更による不安	受持ち患者が変更になって戸惑った 最初からの関係づくりが不安だった
		患者に必要なケアの再考	意図的に患者の元に行くようにした カンファレンスを通して患者に必要なケアを考えた
		患者から受け入れられた実感	患者の心に近づいたと感じた 自分にしか見せない姿が見られるようになった ありがとうと言ってもらえた

注) 学生の実習 1 週目と 2 週目は一連の経験として語られていたことからまとめて示す。

てこれからの実習が不安だった」「コミュニケーションなどでこれまでの実習がうまく進まなかったから不安があった」「これまでの実習で受け持ったことがない男性患者だった」「過去に受け持ったことがない初めての患者の状態が不安だった」など、『コミュニケーションがうまくとれなかった実習経験から不安があった』『過去に受け持った経験がない患者で不安だった』ことを語っていた。

(2) 【やっていけそうだという思い】

① <過去の実習によるやっていけそうだという思い>

学生は「過去の実習と同じようにやっていけそうだという感覚があった」「以前の実習から今回の実習でもあまり構えずやっていけそうだった」と思った。『過去の実習でもできたのでやっていけそうだった』『以前の実習経験から構えずやっていけると思った』ことを語っていた。

② <笑顔で挨拶や会話ができたことによる

やっていけるとする思い>

学生は「スムーズに話ができただけでうまくいきそうと思った」「笑顔で挨拶ができてこれからの実習も大丈夫だと思った」など、『会話がスムーズにできてうまくいきそうと思った』『笑顔で挨拶ができたことでやっていけると思った』ことを語っていた。

2) 実習 1 週目～2 週目における心理的距離感に影響を及ぼす要因

インタビューにおける学生の実習 1 週目と 2 週目は、一連の経過として語られており、明確に区別することができなかつたため、実習 1 週目～2 週目はまとめて示した。実習 1 週目～2 週目は【よい援助関係構築のための努力】【患者との関わりへの葛藤】の 2 カテゴリーから構成されていた。

(1) 【よい援助関係構築のための努力】

このカテゴリーは、<患者との関係性を築くためのコミュニケーションの実施> <患者のニーズと心地よさに配慮した基本的なケアの実施> の 2 サブカテゴリーから構成

されていた。

① 〈患者との関係性を築くためのコミュニケーションの実施〉

学生は「なるべく積極的にその患者の元へ行って、返事が無いながらも話しかけることによって返事がもらえるようになった」「患者と会話をしないと距離は近くなれないなと思った」「患者の元に行くと笑顔で話してくれた」「患者の今までのことを知りたいと思って話を広げていった」「患者自身を知りたいという姿勢でコミュニケーションをとったことでだんだんと患者さんが見えてきた」など、『積極的に患者の元を訪れた』『患者を知るためのコミュニケーションをとった』ことを語っていた。

② 〈患者のニーズと心地よさに配慮した基本的なケアの実施〉

学生は「こんなケアをした方が患者は喜ぶかなと考えてケアを行った」「清拭や足浴など患者のニーズからケアを取り入れていくことにした」「ケアを心地よく感じてもらえたことで距離が近くなった」「患者に気持ちいいと言ってもらえるケアを心がけて、上達していくことで信頼感が得られたと思う」など、『患者のニーズからケアを行った』『ケアは患者が心地いいと感じてもらえるように行った』ことを語っていた。

(2) 【患者との関わりへの葛藤】

このカテゴリーは、〈患者の状態変化によるためらい〉〈実習生としての行動をとることによる戸惑い〉〈患者変更による不安〉の3サブカテゴリーから構成されていた。

① 〈患者の状態変化によるためらい〉

学生は「患者の体調の変化があって患者のところにいけなくなって戸惑った」「患者の状態が変わって、言葉が聞き取れず何度か聞き直すことになったことで戸惑った」「患者の状態が変わって、どうしたんだろう、怖いと思って患者のところにいけなかった」「患者の体調が悪いのかなと思って行くのをためらってしまった」など、『患者の状態が変化することで戸惑った』『患者の状態が変わって患者の元に行くことをためらった』ことを語っていた。

② 〈実習生としての行動をとることによる戸惑い〉

学生は「患者はすぐに対応してほしいかと思ったと思うけれど、学生はひとりでは対応ができないから看護師さんと呼んでくれますねと言うしかなかった」「患者に退院について聞かれて、知っている内容であっても学生から言うことはできないと考え悩んだ」「実習指導やカンファレンスで患者の元に行けなかったことで戸惑って悩んだ」「教員との面談で援助が予定通りにできなかったことで戸惑った」など、『実習生としての行動をとらなくてはならないことで悩んだ』『実習指導やカンファレンス参加のため患者の元に行けず戸惑った』ことを語っていた。

③ 〈受持ち患者変更による不安〉

学生は「患者が変更になって戸惑って不安になった」「患者が変わってまた最初から始めなくてはいけないことに戸惑った」「また新しく患者と信頼関係をつくっていけるか不安に思った」「新しい患者とやっていけるか不安だった」など、『受持ち患者が変更になって戸惑った』『最初からの関係づくりが不安だった』ことを語っていた。

3) 実習3週目における心理的距離感に影響を及ぼす要因

実習3週目は【新たな関係性の構築】から構成されていた。このカテゴリーは〈患者に必要なケアの再考〉〈患者から受け入れられた実感〉の2サブカテゴリーから構成されていた。

(1) 【新たな関係性の構築】

① 〈患者に必要なケアの再考〉

学生は「患者のところに堂々に行くようにした」「相手を気にかけて、挨拶に行くだけでも患者の元に行くようにした」「カンファレンスでの学生メンバーからのアドバイスをもとに本当に必要な患者のケアは何かを考えた」「どういう援助できるだろうかとカンファレンスでも色々考えた」など、『意図的に患者の元に行くようにした』『カンファレンスを通して患者に必要なケアを考えた』ことを語っていた。

② 〈患者から受け入れられた実感〉

学生は「患者さんの中で徐々に私の存在が大きくなって、患者さんとの心の距離が近くなったと思った」「少しずつケアのと

きに協力してくれるようになって徐々に心の距離が近くなった」「だんだんと私にしか言わない訴えや姿を見られるようになり信頼されているかなと思えるようになった」「最初とは全く違う関わりが少しずつできて新たな患者の姿が見られてすごくうれしかった」「看護師さんに言えないようなことも私には言ってくれるようになった」「実習最終ではありがとうって言葉と笑顔が見られた」「最後の挨拶をしたらありがとうと何度も言って涙を流してくれた」など、『患者の心に近づいたと感じた』『自分にしか見せない姿が見られるようになった』『ありがとうと言ってもらえた』ことを語っていた。

III. 考察

実習経過における学生の捉えた患者との数値的距離、インタビューから抽出した実習経過における心理的距離感に影響を及ぼす要因、それらから看護教員の実習指導のあり方について考察する。

1. 実習経過における数値で示された心理的距離感

3週間の全実習期間を通して、数値的距離が近くなった学生4名は、患者変更や患者の状態変化など、学生にとっては予想外の出来事が起きなかったことが影響している可能性が高い。つまり、実習経過に伴い、コミュニケーションやケアの実施など、学生は患者と接する機会が増え、その結果として、患者との心理的距離感を近づけていったと考えられる。

これに対して学生6名の数値的距離は、2週目が 76.7 ± 6.1 cmで、実習1週目に比べて2週目は一旦離れていた。この6名は、実習2週目に患者の状態変化、患者変更、実習生としての行動による戸惑いを語った学生であった。しかしこの学生らも実習3週目には 35.8 ± 8.0 cmと、再び数値的距離は近づいていた。

2. 実習開始時における心理的距離感に影響を及ぼす要因

学生は実習開始時に患者との心理的距離感を最も離れていると感じていたが、これは、学生と患者の出会いの場であり、初対

面の相手であることが影響していると考えられる。現代の大学生は、初対面の人や親しくない人などとのコミュニケーションを苦手とし、長期的に見通される人との出会いでは戸惑いや不安を感じやすい傾向にあることが報告されている⁷。また山下らは、看護学実習中の学生が直面する問題のひとつは、初対面の相手との円滑なコミュニケーションであり、学校とは異なり、多様な人間が複雑に絡み合う新たな学習環境へ移行することにより生じると述べている⁸。〈患者と会話することへの苦手意識〉は、こういった現代の大学生の一般的な傾向と、病院における実習という新たな学習環境・方法に学生自らが適応していかなくてはならないことへの不安や緊張が心理的距離に影響を及ぼしていると考えられる。また、コミュニケーションがうまくとれなかった実習経験や未経験の患者を受持つことが、不安に繋がっていると推測する。これから始まる実習について不安を語った学生がいた一方で、【やっていけそうだという思い】を持った学生もいた。学生は患者の承認を得られているという自己肯定感によって、患者とのかかわりに積極性が生じ、実習に取り組む態度や学習意欲への変化に繋がっていく⁹ことが明らかにされている。また、自己効力感が高ければ、看護場面における様々な課題へ取り組む意欲や積極性は高まる¹⁰と言われている。本研究では過去の実習経験や患者と挨拶や会話ができただことが成功体験となっている学生は、【やっていけそうだという思い】につながっていた。しかし、うまくいかなかった、いわば失敗に類する経験が現在や未来にプラスに働く場合もあれば、逆に成功経験がマイナスに働く場合もある¹¹。すなわち過去の実習経験は、成功・失敗のどちらであっても学生の印象に残り、実習開始時の心理的距離感に影響を与え得ると言える。

以上のことから、看護教員は実習開始時に学生の実習への不安・緊張ができるだけ緩和し、学生と患者の挨拶や会話がスムーズに進むよう関わる必要がある。さらに、過去の実習経験が現在の実習に影響する可能性があることをふまえて、自信につなが

る実習経験となるよう支援していくことが求められる。

3. 実習1週目～2週目における心理的距離感に影響を及ぼす要因

実習1週から2週には〈患者との関係性を築くためのコミュニケーションの実施〉と〈患者のニーズと心地よさに配慮した基本的なケアの実施〉といった【よい援助関係構築のための努力】が行われていた。〈患者との関係性を築くためのコミュニケーションの実施〉では「なるべく積極的にその患者さんの元へ行って、返事が無いながらも話しかけることによって徐々に返事がもらえるようになった」「患者さんと会話をしないと距離は近くなれないなと思った」などの語りから、学生が積極的に患者の元を訪れていたことがわかる。さらに、「患者の今までのことを知りたいと思って話を広げていった」「患者自身を知りたいという姿勢でコミュニケーションをとったことでだんだんと患者さんが見えてきた」などの語りから、学生は患者を知るための意図的なコミュニケーションをとっていた。これは学生と患者双方が互いに関心を持ち、親しみを抱く過程と捉えられる。そしてこの過程を経ることによって学生の患者との心理的距離感は近くなっていったと考えられる。

また、学生は〈患者のニーズと心地よさに配慮した基本的なケアの実施〉をしていた。この時期は「こんなケアをした方が患者は喜ぶかなと考えてケアを行った」「清拭や足浴など患者のニーズからケアを取り入れていくことにした」といった語りから、患者を深くアセスメントして導いた、個別性を生かしたケアというより、患者のニーズを捉えてはいるものの、基本的なケアの実施にとどまっていると推測される。しかし、学生が行った基本的なケアの中には、患者の心地よさへの配慮がされており、学生の患者のためを思う姿勢が伺える。

以上のように学生は実習経過において【よい援助関係構築のための努力】をすることによって、患者との心理的距離感を近づけていったと考えられる。

一方、実習2週目には〈患者の状態変化

によるためらい〉〈実習生としての行動をとることによる戸惑い〉〈受持ち患者変更による不安〉から学生には【患者との関わりへの葛藤】があったことがわかった。患者の状態変化や新しい患者を受け持つことは、知識・技術の未熟な学生にとっては脅威となり、患者に関わることへのためらいとなると考えられる。この学生のためらいや戸惑いは、対人距離を遠くする可能性がある¹²。また、学生にとっては、患者とうまくコミュニケーションをとれるかどうか、学習意欲や自己効力感に影響するため¹³、教員は、受持ち患者の変更や患者の状態が変化した場合には、学生の患者に対する心理的距離感は一且離れる傾向にあることを理解し、このことが実習のモチベーションの低下や困難性を高めないように配慮し、指導することが必要である。さらに患者の心身の状態については、学生の理解が進むよう、教員側から手を差し伸べるような指導も必要であると考えられる。

本研究では実習生の行動として求められるカンファレンスの参加や、教員からの実習指導が学生の戸惑いとなっていた。学生が患者と【よい援助関係構築のための努力】をしている中、実習生としてとらなくてはならない行動は、【患者との関わりへの葛藤】、すなわちストレスや困難感として、学生の患者との心理的距離感が離れる要因になる可能性がある。したがって看護教員は、実習生としての行動には、時として学生の患者へのためらいや戸惑いを生じる可能性があることを理解し、タイミングをよく見極めた指導を行うことの重要性が示唆された。

4. 実習3週目における心理的距離感に影響を及ぼす要因

実習3週目で学生は患者と【新たな関係性の構築】をしていることがわかった。そして、2週目に数値的距離が離れた学生6名を含め、3週目には10名全員の患者との数値的距離は近くなっていった。実習3週目の学生は、患者に適した関りやケアとは何かを知るために、意図的に患者の元を訪れる、カンファレンスを活用するなど、〈患者に必要なケアの再考〉をしていた。

これは実習 2 週目の【よい援助関係構築のための努力】【患者との関りへの葛藤】から一步踏み込んで、患者の立場になって関わろうとするためと考えられる。その結果として学生は、患者が『自分にしか見せない姿が見られるようになった』『ありがとうと言ってもらえてうれしかった』など〈患者から受け入れられた実感〉を語っていた。關戸¹⁴は、教員が学生に介入的な指導をしなくてもよい援助関係を築けていけると感じる転換点があり、それは学生の記録に「患者に思いを巡らす」記述が見られる時期とほぼ一致すると述べている。また山下ら¹⁵は、看護学実習における学生の学習活動を学習者から援助者への立場の転換と表現している。本研究における【新たな関係性の構築】は、実習経過を通して、学生は患者に思いを巡らせることができる、すなわち患者に寄り添うことができる援助者へと立場の転換がなされた結果であると考える。しかしこの時期への到達には個人差がある¹⁶ことから教員は、実習記録からも学生の実施している看護の方向性や患者への思いを把握しつつ、焦ることなく見守るという指導を心がける必要性が示唆された。

5. 本研究の限界

本研究は 1 施設の 10 名の看護学生の成人慢性期看護学実習の回顧的インタビューから得られた結果である。研究協力者である学生の語りの未熟さと時間的制約がデータ分析に影響した可能性がある。また、今回、学生の個々の実習進度や経験などの背景による差異、成人慢性期看護学実習の特性との関連には言及していない。これらを考慮し、さらに検討していく必要がある。

結論

3 年次の成人慢性期看護学実習を履修した 10 名の学生を対象に、学生の捉える患者との心理的距離感と影響を及ぼす要因を明らかにする目的でインタビュー調査を行い、以下のことがわかった。

1. 学生に患者との心理的距離感を 0~100cm で示してもらった数値的距離は、実習 3 週目には学生全員が近づいていた。しかし、

一部の学生では、患者の状態変化、実習途中の患者変更、カンファレンスの参加や教員からの指導を受けるなどの実習生としてとるべき行動の戸惑いによって、数値的距離は一旦離れたが、実習が進むと再び近づいていた。

2. 学生の語りを分析した結果、心理的距離感に影響を及ぼす要因は、実習開始時では【心理的障壁】【やっていけそうだという思い】、実習 1 週~2 週目では【よい援助関係構築のための努力】【患者との関りへの葛藤】、実習 3 週目では【新たな関係性の構築】であった。

看護教員はこれら影響要因をふまえた実習指導が必要である。

謝辞：本研究にご協力してくださった学生の皆様、ご指導いただいた皆様に心から感謝申し上げます。なお、本研究結果の一部は 2021 年第 41 回日本看護科学学会学術集会において発表した。

引用文献

- 1) 杉山敏子, 岩見谷生恵, 田多英興, 基礎看護学実習 I における対人距離の変化とその規定要因, 東北大医短部紀要. 2001, 10(1), 31-39.
- 2) 渡邊生恵, 杉山敏子, 柏倉栄子, 田多英興, 基礎看護学実習 I・II における学生-患者間の対人距離の変化, 東北大医短部紀要. 2002, 11(2), 245-252.
- 3) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子, 渡邊生恵, 精神看護学実習における学生-患者間の対人距離の変化, 東北大医短部紀要. 2004, 13(2), 157-164.
- 4) 渡邊生恵, 杉山敏子, 石田真知子, 柏倉栄子, 三年間の臨地看護実習における学生-患者間の対人距離の変化, 東北大医短部紀要. 2005, 14(2), 65-72.
- 5) 山根一郎, 私とあなたの心理的距離感, 青山社, 2005, 1-5.
- 6) エドワード・ホール. かくれた次元. 日高敏隆, 佐藤信行 訳, みすず書房, 1970, 160-181.
- 7) 後藤学, 大坊郁夫, 大学生はどんな対人

場面を苦手とし得意とするのか？
ーコミュニケーション場面に関する
自由記述と社会的スキルとの関連ー,
対人社会心理学研究. 2003, (3), 57-
63.

- 8) 山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子, 看護学実習中の学生が直面する問題ー学生の能動的学修の支援に向けてー, 看護教育学研究. 2018, 27(1), 51-65.
- 9) 庄子弘子, 成人看護学実習の急性期と慢性期におけるポジティブ体験形成に関連する要因の比較, 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集. 2018. 19 卷, 145-153.
- 10) 高畑正子, 日浅友裕, 奥村玲子, 成人看護学実習における看護学生の行動達成度と自己効力感の関連, 日本国際情報学会誌『国際情報研究』. 2019, 16(1), 70-77.
- 11) 尾崎仁美, 上野淳子, 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響-成功・失敗経験の多様な意味, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要(27). 2001, 63-87.
- 12) 前掲 1)
- 13) 前掲 10)
- 14) 關戸啓子, 臨地実習において看護学生と高齢者の援助関係が深まる転換点に関する検討, 京都府立医科大学看護学科紀要. 2020, (30), 45-53.
- 15) 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ, 看護学実習における学生行動の概念化, 看護教育学研究. 2003, 12(1), 15-28.
- 16) 前掲 15)

Changes and factors influencing nursing students' perceptions of the psychological distance from their patients in adult nursing practicums

Kaori Tsutsumi¹⁾, Keiko Kawamura²⁾, Satomi Nasu¹⁾

1) Takarazuka University of Medical and Health Care, Faculty of Wakayama Health Care Sciences,
Department of Nursing

2) BAIKA Women's University, Faculty of Nursing and Health Care, Department of
Nursing

Abstract

In this study, 10 undergraduate nursing students enrolled in Adult Chronic Care Nursing Practicums (3 weeks) in their third year were interviewed with the aim of identifying the students' perceptions of psychological distance from patients and the factors that influence them.

The results showed that the perception of distance index, which represents the students' perceptions of psychological distance from patients rated on a scale of 0 to 100 cm, decreased as the practicums progressed. However, the perception of distance index temporarily increased for some students due to changes in patient conditions, patient changes during the course of their practicums, and confusion about the actions to take as a trainee but subsequently decreased again as the practicums progressed.

A qualitative descriptive analysis of the students' narratives revealed that the following factors influenced the students' perceptions of psychological distance: "psychological barriers to a practicum" "the feeling that one can make it through" at the beginning of the practicum, "efforts to establish a good supportive relationship" and "conflicts regarding relationships with patients" in the first and second weeks of the practicums and "building new relationships" in the third week of the practicums. Nursing teachers need to provide practical guidance based on these influencing factors.

Keywords: psychological distance, adult nursing practicum, practical guidance